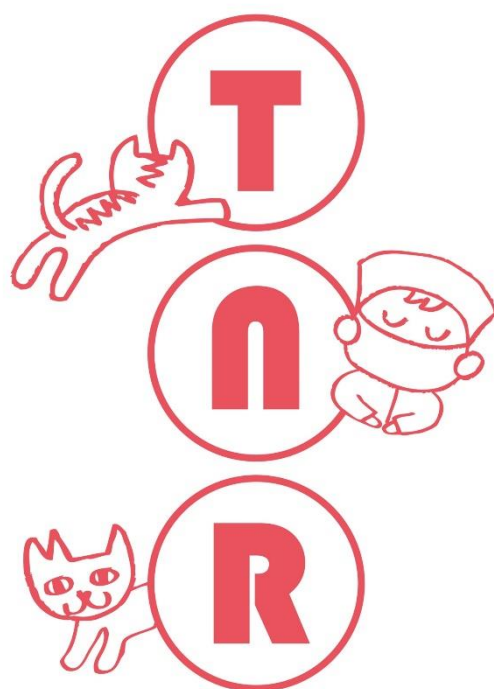


多頭飼育崩壊手術支援 実施報告書



doubutukikin since 1988

主 催：公益財団法人どうぶつ基金
協 力：大阪ねこの会・一犬猫病院
期 間：平成27年4月26日（手術日）

ケース1：神戸市西区多頭飼育崩壊現場

申請日：2016年4月21日

場所：神戸市西区 実施責任者：森久容

協力団体：神戸ナナプロジェクト・A.P.L KOBE・ミントハウス

生活保護の需給状況：無

申請から不妊手術完了までの経緯（報告書より）

神戸ナナプロジェクトから相談を受けた申請者M氏が現場を見に行くと、多頭飼育崩壊現場の当事者の方が所有する会社のプレハブの建物に数十台のキャリーケースが置かれ、その中に猫が入れられていた。キャリーケースに猫は閉じ込められたままとなっており、その理由は子猫ができるからと話していた。世話は週に3回、夜ご飯を与える程度であった。プレハブ内に77頭の猫を確認し、頭数が非常に多いことから、どうぶつ基金へ無料不妊手術の申請をするに至った。申請が受理され、初回の手術日には34頭引き出した。不妊手術を行うにあたり、猫全頭の不妊手術を行うことの同意書を当事者から取得していたが、手術後、当事者と申請者の関係が悪化し継続的な引き出しは困難となった。手術日に手術をした34頭は多頭飼育崩壊現場には戻さず、申請者M氏側で引き取り、現状を知った他団体や個人ボランティアの方々の協力の元、保護里親探しを行っている。



ケース2：神戸市北区多頭飼育崩壊現場

申請日：2016年4月16日

場所：神戸市北区 実施責任者：宇野さつき

協力団体：個人ボランティア・里親募集については一部「猫の保育園」に依頼

居住環境：兵庫県神戸市2DKの市営住宅

居住者：父(61)、母(58)、息子(30)の3名

生活保護の需給状況：有

申請から不妊手術完了までの経緯（報告書より）

2年前に知的障害を持つ息子が拾ってきた猫4頭が室内で繁殖し、37頭にまで増えていた。室内はマーキングの臭いがひどく、多頭飼育崩壊現場の当事者が知人に相談したことをきっかけに、知人経由でU氏（神戸でTNRや里親探しの活動を行っている個人ボランティア）に相談があった。生活保護を頼りに暮らす状況下で、37頭の不妊去勢手術の費用捻出は難しく、どうぶつ基金のさくらねこ無料不妊手術申請へと至った。

不妊手術は、どうぶつ基金出張手術会場で実施することとなったが、飼い主自身、猫の正確な頭数を把握しておらず、用意するケージの数が分からず困った。また、オスメスを分けて飼育していると言っていたが、子猫や妊娠後期のメスや授乳中のメス猫もいた。どうぶつ基金の出張手術日に27頭の不妊手術とワクチン、ノミ駆除をどうぶつ基金負担で実施。出張手術の際に授乳中等で手術が出来なかったメス3頭はU氏の負担で後日不妊手術を実施し、幼齢の子猫は「猫の幼稚園」の協力を得て里親に譲渡した。手術を受けた猫のうち、17頭は現場に戻し、飼い主が継続して飼育している。



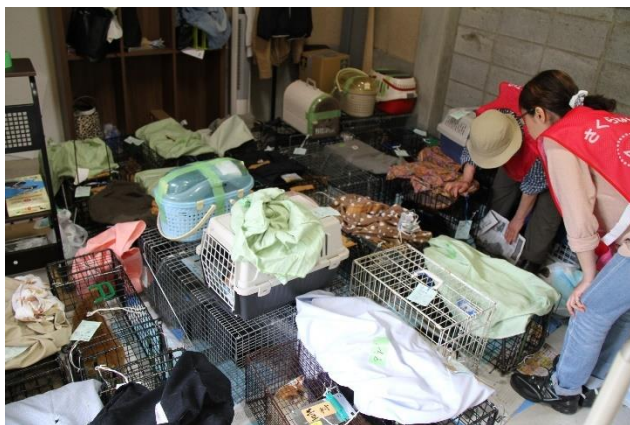
手術会場は、どうぶつ基金の協力病院である一犬猫病院分院予定地を借り実施。



手術スペース



麻酔、抗生剤投与スペース



手術会場内の手前スペースに保管。



手術後、夕方にボランティアが連れて帰った。

タイムスケジュール

4月26日（火）	
09:20	朝礼
09:40	手術開始
12:00	昼休憩
13:00	手術再開
16:30	手術終了
17:00	撤収完了・終礼



協働人数

日程	どうぶつ基金	大阪ねこの会	現場ボランティア	合計
4月26日	スタッフ3名 獣医師4名	7名	9名	23名



手術数

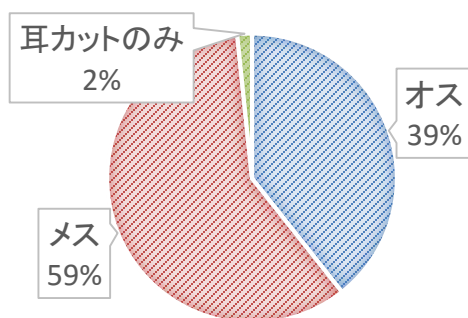
	オス	メス	耳カットのみ	計
第一現場	14	19	1	34
第二現場	10	17	0	27
計	24	36	1	61

処置内容

不妊去勢手術、ノミ・ダニ・回虫の駆除薬（レボリューション）、ワクチン、点眼、補液50cc

オスメス割合

■ オス ■ メス ■ 耳カットのみ



捕獲して



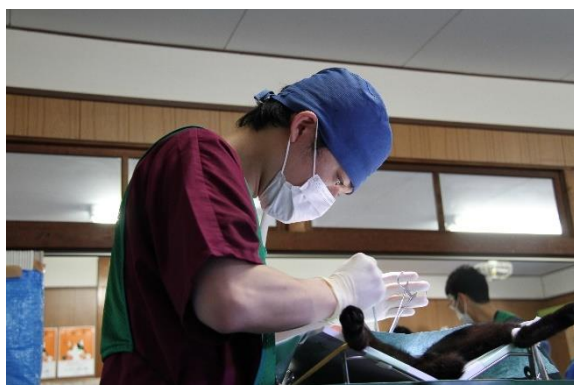
不妊手術をしてサクラ耳カット



元の場所に戻す



● 山口獣医師長（執刀医）



● 稲葉獣医師（執刀医）



● 後藤獣医師（執刀医ボランティア参加）



● 池田医師（ボランティア参加）

TNRとは



捕獲して
Trap



不妊手術をし
Neuter



元の場所に戻す
Return

手術会場の様子

doubutukikin



●手術前に全員で朝礼を行う



●山口獣医師長から注意事項の説明



●安定剤、麻酔を打っていく



●避妊手術に備えて、お腹の毛刈りをする



●不妊去勢手術



●手術が終わった猫は夕方にボランティアさんがそれぞれ連れて帰る

Sakura Neko
TNR

第一現場（ボランティア報告書より）

手術の同意書を事前に取得していたが、手術後に当事者の主張が変わり、継続して介入することができなくなった。いくら、同意書に一筆を取っても、通用しないケースがあると痛感した。引き上げる前に飼い主を何とかしないと、保護活動に差し支えが出てしまい、助けたくても助けられないと感じました。

どうぶつ基金スタッフメモ

今回のケースは、昨年支援した多頭飼育崩壊ケースと問題の質が大きく異なる。昨年支援したケースは、一般の飼い主が不妊手術を怠ったために、室内で繁殖し多頭飼育となってしまったケースであった。今回は、あえて猫を保護してキャリーケースに收容するという、“集めている”ケースであった。77頭という膨大な頭数の猫を、狭いケースの中で飼育することは動物愛護法のネグレクトに該当する可能性が高いと考えられる。こういった飼育環境下で飼い主が改善の意志を強く持っていない場合は、警察や保健所との連携も視野に入れて介入していく必要があると考えさせられたケースであった。

第二現場（ボランティア報告書より）

今回、どうぶつ基金やボラティアが尽力し不妊手術や里親探しを行ったことに対し、当事者である飼い主は、当たり前のように何ら感謝もしてない様子です。インターネットがないため、理解できていなかったようですので、今後は、費用負担を誰がしているのかなど、きちんと説明していきます。

どうぶつ基金スタッフメモ

多頭飼育崩壊は、猫を飼育し始めた際に、不妊手術を行った飼い主の責任は非常に大きいですが、頭から飼い主を責めすぎてしまえば、殻に閉じこり現在飼育している猫の不妊手術や里親探しも拒否されてしまう展開にもなりかねない。しかしながら、多頭飼育という事の重大さを当事者に理解してもらうことは、多頭飼育崩壊という悲惨な事態を2度と繰り返さないためにも重要な課題である。

増えてしまった猫に困惑しながらも、保健所に持っていくという選択はしない飼い主の気持ちを尊重しつつ、飼育方法について指導するところはきちんと指導し、近すぎず離れすぎない微妙な距離感が現場に入るボランティアには求められている。生活保護を受給しているのであれば、ケースワーカーが間に入るなど、行政機関を巻き込んだ取り組みも今後は検討していく必要がある。

 公益財団法人
どうぶつ基金